群教セ	G11 - 03
	平15.211集

望ましい人間関係の育成に着目した「小学校学級活動プラン」支援資料の作成

── 認め合い、進んでかかわり合う子どもたちの育成を目指して ──

長期研修員　山野　玲子

《研究の概要》

本研究は、認め合い、進んでかかわり合おうとする子どもたちを育成するために「望ましい人間関係の育成」に着目した学級活動(2)と学級活動(1)を関連づけ、小学校低・中・高学年それぞれの授業を構想する学級担任のための支援資料を作成した。本資料は目指す子どもの姿を明示し課題把握できるような資料提示の工夫、子どもたちが認め合い、進んで関われる授業展開・支援の工夫､学級活動の基本的な指導のＱ＆Ａ等で構成されている。

【キーワード：学級活動　小学校　望ましい人間関係　活動プラン　】

Ⅰ　はじめに

子どもたちが一日の大半を過ごす学級での生活が満足・充実することは誰もが願っている。子どもたちは所属する集団の仲間と信頼と愛情で深く結ばれ､互いを認め合うことで、心が安定し、ひとりひとりが自分の為すべき生活や学習の課題に真剣に取り組むことができる。さらに、集団の一員であることを自覚することで、自分の力を精一杯出し切り、よりよい生活を目指して活動する。このような活動が子どもたちの満足・充実した学級生活を創り出すと考える。

しかし、今日、いじめ・不登校等、子どもたちの集団や社会への不適応行動が問題となっている。これらは、少子化や社会の急激な変化の中で子どもたちの人間関係を築く機会が失われてきているために、相手の立場に立って考えたり、気持ちをわかろうとしたりする態度が育っていないためだと思われる。

日本特別活動学会「社会性の育成」に視点をあてたアンケート調査結果（H14.12 実施教師 516 名）によると､今の子どもたちは「望ましい人間関係を築く力が不足」(69.3%)「集団生活を営む力が不足」（65.6%）があげられている。また、特別活動調査（H14.10 実施県内特別活動主任 166 名対象）においても、特別活動で育てる重要な資質・能力等で「望ましい人間関係を築く力」、次いで「人格を尊重し、個性を認め合い、伸ばしていく活動を行う力」が不足していることがあげられている。

これらのことから、人間関係を築く基盤である学級において、どの子も認め合い、進んでかかわり合う望ましい人間関係を育成する機会を積極的につくっていくことが重要である。今こそ、集団活動を通して培われる「望ましい人間関係の育成」に目を向け、子どもたちを育てることが重要であると考える。そこで、学級活動(2)「望ましい人間関係の育成」に着目し、学級活動(1)と関連づけ小学校低・中・高学年のそれぞれの授業を構成した。発達段階ごとの目標を明示し、担任が子どもたちの成長を意識し活用できる学級活動プラン支援資料集を作成したいと考えた。

Ⅱ　基本的な考え方

１　望ましい人間関係の育成に着目した学級活動プラン

「望ましい人間関係の育成」は学級活動(2)の内容の一つであり、この学習で得た新たな知識や価値を「よりよい生活をしよう」と課題解決能力を育む学級活動(1)と関連づけ、体験を通して、生活を支え改善を図る実践力や行動力として育みたいと考えた。認め合い、進んで関わり合い、よりよく生きようと意欲的な態度を育む機会を意図的、計画的に積み上げていけるような学級活動を図１のように構想した。

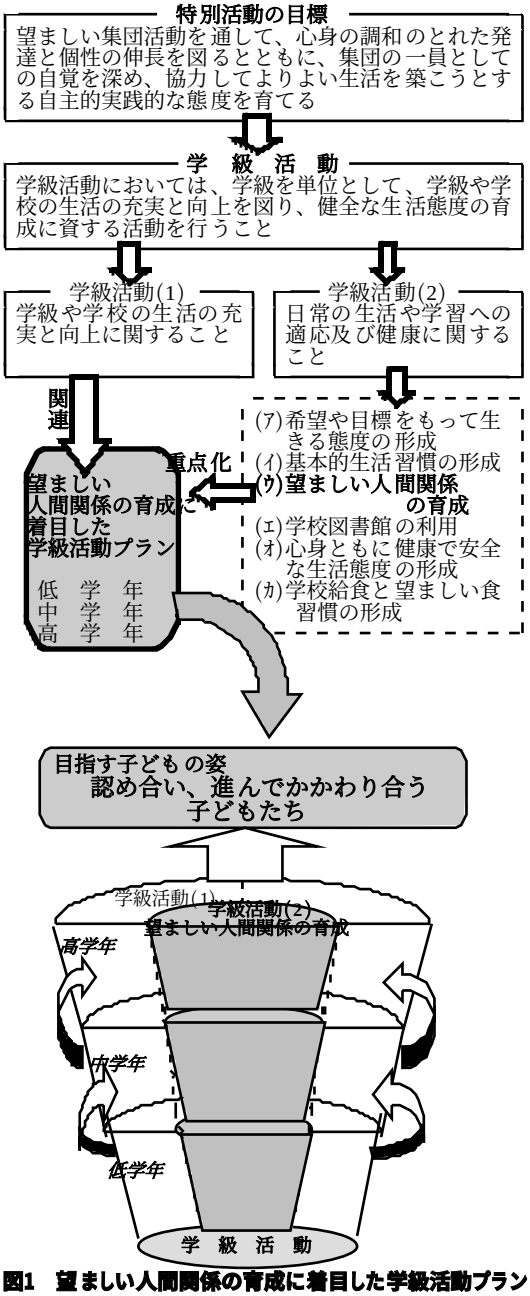

図1　望ましい人間関係の育成に着目した学級活動プラン

「為すことにより学ぶ」特別活動の特質から、活動の目標（目指す姿）を明確にし、活動の過程を重視する学級活動の展開例を提示し、担任が一つ一つの活動で子どもたちに身に付ける資質・能力を意識できるようにした。

そこで、児島邦宏氏の「特別活動における学力観」の理論を土台に「望ましい人間関係の育成」に着目した学級活動の構想を下記のように考えた。

児島邦宏氏は図３のように特別活動の学力観を２つの軸から４つの場面に分けてとらえている。A は基本的生活習慣育成の場、B は社会的技術育成の場、C は自己の在り方・生き方育成の場、D は特別活動の到達目標である自主的・実践的態度育成の場として位置づけ、目標到達に２つの経路で能力を獲得していくと述べている。

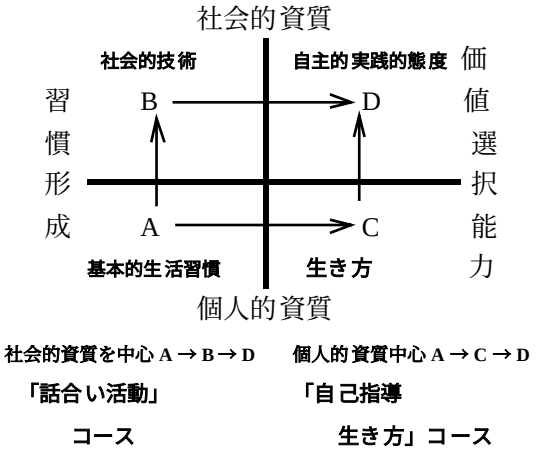

図2　児島邦宏氏による特別活動の領域的学力観

上記の理論をもとに考えると、社会的資質の育成中心のＡ→Ｂ→Ｄ「話合い活動」コースは主に学級活動(1)、個人的資質の育成中心の「自己指導・生き方」Ａ→Ｃ→Ｄコースは主に学級活動(2)の内容で構成される。つまり、子どもたちの意欲的な学級生活の基盤となる自主的実践的な態度は、単なる知識・理解に終わるのでなく、生活を支え、改善を図る実践力や行動力として、２つのコースがあいまって育まれると考えられる。そこで、学級活動(2)「望ましい人間関係の育成」に着目し、学級活動(1)と関連させた学級活動プランを作成した。具体的には、「望ましい

人間関係の育成」はまず自分と集団を組織する友だち（他者）との信頼関係を築くことから始まると考える。そこで、どの子のよさも認め合う資質・能力を育てる「自他のよさを認める」視点での学級活動を考え、「自他」を知る活動「自他のよさ」を進んで見つけることができる力を育てる学習を組み立てた。さらに、そこで築かれた信頼関係を深め、広げていけるような「かかわりを深める」視点から学級活動を構成した。学級活動(1)では、子どもたちが安心して自分の思いを伝えたり、進んで友だちとかかわろうとしたりできるように、「話合いの仕方を身に付ける」視点とよりよい生活を目指して友だちと話合い、協力して活動を成し遂げる「ともに活動する喜びを味わう」視点から学級活動を構成した。上記のような、４つの視点（学級活動(2)で２つ、学級活動(1)で２つ）で構成した学級活動を実践することで、学級活動(2)で学習した内容と学級活動(1)の主体的な取組があいまって、図４のように子どもたちの間に認め合い、進んで関わる望ましい人間関係が築かれ、よりよい生活をもとめ意欲的に生活する態度を育むことができるのではないかと考えた。

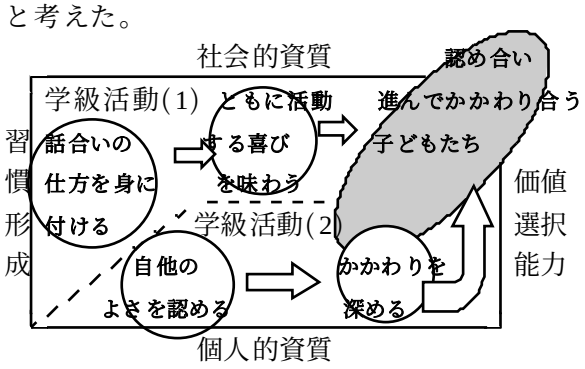

図３　児島理論に基づく４つの視点で構成した学級活動

２　認め合い進んでかかわり合う子どもたちとは

子どもたちは、集団に属し、周囲の仲間に思っていること、感じていることを言葉で伝えたり、友だちの考えを理解したり、互いのよさを認め合うことで、精神的な充実感を感じ、安心して生活することができる。これは、自分に対して自信をもつということと、他者を信頼するという、自他の関係が肯定的・調和的であることである。他者を信頼し、また、他者から信頼される相互の信頼関係が自分に対しての自信をつくりあげていく。また、自分に対しての自信がつくと他者への寛容さが生まれ、相互の信頼関係がより深められる。このような関係が築かれると、子どもたちは安心して自己表現し、為すべき課題に真剣に取り組むことができる。さらに、自分の力を精一杯出し切り、友だちと進んでかかわり、よりよい生活をめざして自主的に活動する。このように認め合い、進んでかかわり合う子どもたちを発達段階に合わせ積み上げて育むことが「望ましい人間関係を育成する」ことにつながると考える。そこで、認め合い、進んでかかわり合う子どもたちを育成するために上記の４つの視点に着目し、教育センターの先行研究から、学級担任のための「小学校学級活動プラン」支援資料を作成した。

３　４つの視点で構成した学級活動について

上記の４つの視点から学級活動を構成する際に下記のような発達段階ごとの目指す姿を明示した。

学級活動(2)「望まし人間関係の育成」に着目し次の①②２つの視点から目指す姿を明らかにした。

①「自他のよさを認める」視点

自他のよさに気付き、認め、よさを伝え合うことで自信をもったり、自分も友だちも大事にしたりすることができる。

低	自分やともだちのことがわかる
中	自分や友だちのよいところに気付き、認め合うことができる
高	自分や友だちのよさを認め、それぞれのよさを尊重することができる

②「かかわりを深める」視点

友だちとかかわることで、よさや大切さを実感し友だちを大事に思う。また、かかわりを深めるよさを感じる。

低	友だちとなかよくなりたい、いっし

	ょに活動したいと感じる
中	相手の気持ちを考えて進んでかかわろうとする
高	友だちとかかわりを広げ、一緒に活動したいと感じる

学級活動(1)社会的資質を育成するために次の①②２つの視点から目指す姿を明らかにした。

①「話合いの仕方を身に付ける」視点

自分や学級の問題を解決するために、思いを伝え合い協力して解決することができる。

低	友だちの考えを聞いたり、自分の考えをみんなの前で話すことができる
中	いろいろな友だちの考えを聞き、よいところを認め、自分の考えを分かりやすく話すことができる
高	多くの友だちの考えを参考に解決方法を考え、自分の考えに根拠を付けて話すことができる

②「共に活動する喜びを味わう」視点

自分や学級の問題を進んで見つけ、協力して解決し、ともに活動する喜びを味わうことができる。

低	友だちとなかよく遊び、助け合うことができる
中	友だちと協力して活動に取り組むことができる
高	友だちと支え合い、助け合って活動に取り組むことができる

III　学級活動支援資料について

１　はじめに

◎「資料作成の目的」

資料作成の目的と活用の仕方を提示する。

◎「学級の子どもたちは育っていますか？」

小中９年間の発達段階ごとの４つの視点から見た目指す子どもの姿を提示することにより、自学級の子どもの成長を振り返り、課題意識をもてるようにする。また、発達段階ごとの計画的な指導の積み上げ、つなげて育てる必要性をアピールする。チェックシートで課題を把握し､資料活用のきっかけをつくる。

２　学級活動展開例

◎「４つの視点から構成した学級活動展開例」

４つの視点から小学校低学年・中学年・高学年の授業展開例を構成し提示する。

○認め合い、進んでかかわり合う子どもが育成できるように次の点の工夫を図る。

・話合い形態の工夫

一人一人の子どもが思いをもち、その思いを伝え合い、高め合っていける話合いを実践するためにいろいろな話合いの仕方、考えの出し方を取り入れた授業展開例を提示した。

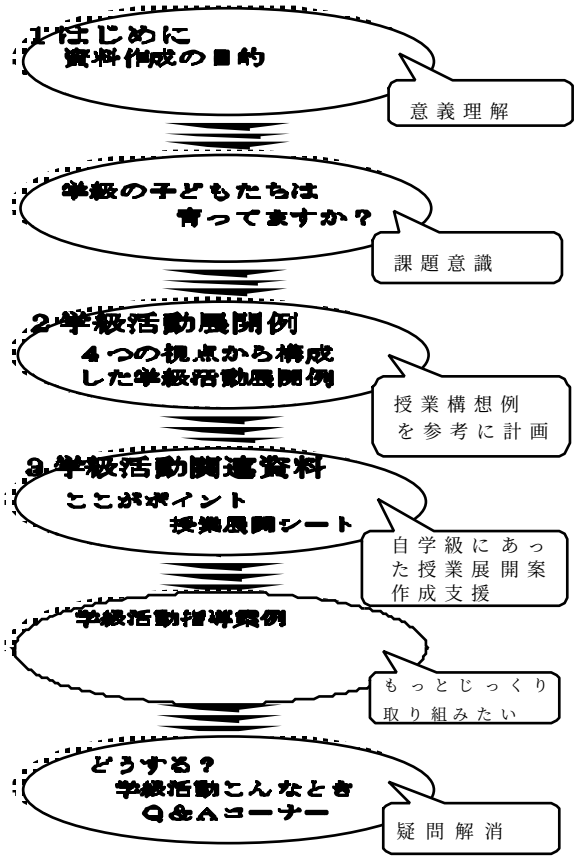

図4　資料構想図

・授業展開の工夫

事前－本時－事後の一連の流れを通して、子どもが課題意識をもち、友だちとかかわりながら活動に主体的に取り組むポイントを提示する。

・資料の充実
子どもの発達段階を考慮し、実態に合わせて使える資料を提示する。授業展開例には活動の効果をねらうシートを提示した。
・支援の工夫
目に見える活動だけでなく、目に見えない（感じ方、考え方等）心や行動の変容を個々に捉え、ほめる・励ますポイントを明示する。
・評価の工夫
自己評価、相互評価及び実態把握のポイントを提示する。
・道徳及び「心のノート」との関連
考え方を深めたり、体験活動を充実させたりできるように、道徳及び「心のノート」との関連を提示する。

授業展開例は教育センターの先行研究を生かし、成果と課題を踏まえて、構想を練り直し提示する。

３　学級活動関連資料

◎「ここがポイント授業展開シート」

授業構想例から授業実践の場面につなげる「授業展開シート」を提示する。授業の各段階での活動のポイント・支援のポイントを示し、子どもの実態に合わせて活動方法を工夫しながら創っていけるシートとする。

◎「学級活動指導案例」

学級活動指導案の基本形式を掲載する。

◎「どうする？学級活動こんなときＱ＆Ａコーナー」

学級活動の基本的事項に答えるコーナーとし、日常の指導で困っていることへのヒント集となるようなコーナーにする。県下特活主任のアンケートの結果から「特別活動実践上の課題」としてあげられた問いを選び、その回答を中心とした内容とする。また、授業構想例の実践にともなう資料も提示する。

＜主な参考文献＞

○児島邦宏著『学校新時代・特別活動の理論　特別活動改革叢書』
明治図書出版　（1996）
○河村茂雄著『グループ体験による学級育成プログラム』　図書文化　（2001）
○八田久弥著　『みんなとの人間関係を豊かにする教材 55』　小学館　（1999）

＜参考資料＞

群馬県総合教育センター研究報告書の中から以下の研究物を資料作成の参考にさせていただきました。

○第 208 集
佐藤利章特別研修員
小林友子特別研修員
○第 199 集
丸山三美長期研修員
○第 201 集
小島理宏特別研修員
○第 194 集
君島正代特別研修員
○第 173 集
河添和子特別研修員
○第 166 集
田中　実特別研修員

Ｔ　Ｏ　Ｐ　へ